

異説「巖流島」

吉村豊雄

吉川英治氏の小説『宮本武蔵』のクライマックスは「巖流島の決闘」である。佐々木小次郎との試合に勝った武蔵が舟島（巖流島）を舟で離れる場面で小説は終わっている。吉川氏の小説は、武蔵死後、武蔵を敬愛する弟子筋の人たちによって作られた武蔵の伝記的書物『二天記』をもとに創作されている。『二天記』自体創作性が高いが、同書によれば巖流島の果し合いは慶長十七年（1612）に行われている。慶長十七年といえば徳川政権と豊臣家との対立が表面化する時期である。

私は、以前から慶長末年という政治的に微妙な時期に、一介の牢人者が大名家をまき込んで、近くの無人島で御前試合形式の果し合いを行うなど、歴史的にもなり立ちえないと考えていた。今もその考えに変わりはない。ただ最近、永青文庫所蔵（熊本大学附属図書館寄託）の『沼田家記』を検討するに及んで、果し合いの事実を見直すようになった。『二天記』や吉川英治氏が描くような果し合いとは違う、いわば異説「巖流島」の話しをしたい。

まずは『沼田家記』の記述を紹介しておこう。同書は、主に細川家重臣沼田家の祖沼田延元の事歴をまとめたものであるが、豊前時代の事歴として巖流島の話しが出てくる。大筋はこうである。武蔵と小次郎は豊前細川領の小倉で「兵法の師」をしていた。ある年、双方の弟子たちが互いに師の「兵法の勝劣」を主張し、豊前と長門の間の「ひく嶋」（彦島、舟島・巖流島）で試合をすることになる。武蔵が勝負に勝ち、小次郎は打ち殺されるが、武蔵方は一対一で勝負するという約束に反して数人の弟子がひそかに島に渡り、蘇生した小次郎をよってたかって打ち殺した。小倉にいた小次郎の弟子たちが事の実相を知り、武蔵を討ち果

たせと「大勢」で島に押し寄せた。逃れがたいと思った武蔵は、門司城に逃げ込み、城代沼田延元に身柄の保護を懇願した。延元は身柄の保護を請け合い、その後馬乗の家臣に鉄砲衆の護衛を付けて、豊後の「武蔵親無二」のもとに送り届けた。

以上が話しの大筋であるが、延元の事歴として誇張するでもなく、城代として遭遇した事件を簡潔に記述しており、作為を余り感じない。また歴史的にも成り立ちうる内容である。『沼田家記』の内容で注目されるのは、①武蔵と小次郎が豊前小倉で「兵法の師」をしていること、②「ひく嶋」で武蔵と小次郎が果し合いを行っていること、③門司城代沼田氏が武蔵の身柄を保護し、豊後へ護送していること、④豊後に「武蔵親無二」が存在すること、以上の諸点である。まず②～④について、最後に①について論及しよう。

ところで、ここでも簡単に「巖流島の決闘」などといっているが、果し合いは領域を統治する大名権力からみれば、果し合いという名の自領内で起こった乱闘・殺人事件である。当然刑事罰の対象となる。『沼田家記』も主に武蔵方の言い分をもとにしていると思える。武蔵は小次郎との勝負に勝っているが、死者に口なし、無人島で何が起こったのか、今となってはわからない。武蔵と弟子たちが集団で小次郎をなき者にした可能性も否定できない。武蔵と小次郎が「豊前と長門の間」の「ひく嶋」を果し合いの場所に選んだのは、ここが大名側（細川・毛利）の統治範囲の曖昧な無人島であったからと推測される。

次に、武蔵が小次郎の弟子たちに追われて門司城の沼田延元のもとに逃げ込んだのは、沼田氏と武蔵がある程度見知った間柄であったことを物語る。沼田氏は武蔵一行

をひとまず城中に保護するが、これは藩主忠興の判断を仰ぐための措置でもあろう。当時の政治形態からみて、刑事事件相当の措置は忠興の命令で行われている。藩主忠興は、「ひく嶋」が自領ではないこと、後述のごとく隣藩の藩主木下延俊とは親しく、武蔵の父無二が身近につかえていることを考慮して、領外追放処分の形をとり、豊後に護送したものと思える。

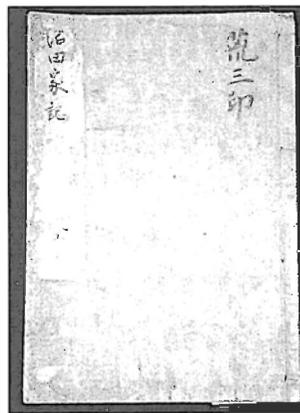
その際に注目されるのが豊後にいる武蔵の父無二の存在である。私が『沼田家記』の史料価値を評価するのは、細川家が武蔵の身柄を豊後（木下家）の無二のもとに護送したと記述し、この無二の存在を『木下延俊慶長（十八年）日記』において確認しうるからである。事件の事後措置としても妥当である。

豊後日出藩の木下延俊は豊臣秀吉の正室ねね（北政所・高台院）の甥であり、妻は細川藤孝（幽斎）の娘である。義兄忠興（小倉藩主）の世子忠利（豊前中津城主）との交友は深く、両家の間柄はきわめて緊密である。日記によると、木下延俊は、慶長十八年、江戸・駿府からの帰路、京都に四ヵ月間滞在し、在京中の五月二日に「無二」と対面し、知行を与え、家臣として召し抱えている。無二は能の観世道叱らとともに毎日のように延俊のもとに祇候し、延俊の話し相手、芸能・武芸の相手をする御伽衆として近侍しており、豊後日出では何度か「兵法」（剣術）の相手をしている。恐らく無二は当時京都において「兵法」をもって知られ、武芸好きの木下延俊が召抱えに動いたものとみられる。

武蔵は無二を養父としている。武蔵にも後に小倉藩小笠原家の家老となる伊織をはじめ何人かの養子の存在が想定されている。無二・武蔵は有望そうな若者を「養子」とし、大名家に接触したとみられるが、無二が武蔵に見込んだのは「兵法」の能力であろう。武蔵は、京都において、無二の「兵

法」の評判を背景に大名家と接触し、細川家を頼って九州小倉に下ったものとみられる。武蔵は小倉において細川家との接触を強め、慶長末年の時代状況と父無二が木下家に召抱えられたことを背景に自らの「兵法」の評価を一気に高め、仕官への道を切り拓こうとして小次郎との果し合いを仕組んだものとみられる。武蔵と小次郎が細川家との関係をめぐって対立していたことも想定される。ところが巖流島での果し合いの実相が小倉に伝わり、小次郎の弟子たちに追われる身となる。細川家との関係も断たれ、恐らく無二もまもなく木下家を辞したものとみられる。武蔵にとって長き漂泊が始まる。

(よしむら とよお 文学部教授)



沼田家記（永青文庫蔵熊本大学附属図書館寄託）

